

1. 献品 小学校保護者から

Tシャツ2 ポロシャツ1 海苔10枚×20 干しうどん1,600g^{グラム} しそ梅干し1,000g^{グラム}
米10kg、5kg×各1 1kg×1

献金 高校職員から 1,000円

2. 夜回り 7月5日(水)

雨。それに肌寒い。かといって何か上にはおるとすぐ汗をかくような夜だった。職場から帰宅して一休みのつもりが寝過ぎてあわてて連絡を入れた。渡辺氏から「お待ちしてます」と即答された。7時20分に出る。気持ちを押しつけて今月限りかもしれない息子を連れて出た。留学の途に就いたら来年6月までは帰ってこない。集会所の中は私を含めた親父が4人、ご婦人が7人と少ない。いつもの薬膳カレーを一つ皿で息子と食べた。8時20分出発。8日の炊き出し案内とおむすび、ゆで卵にこの季節の蚊取り線香、それに自炊者には一人一本のカセットボンベと米一合が付く。

法務局裏の公園は荷物だけで人はいない。案内とおむすび類だけ置いた。雨を避けて快適に過ごしていることを祈る。国際センターの裏のベンチ。声掛けするが眠ったまま。用意したものを置き「お気をつけて」と言って過ぎた。いつか何かを相談してくれることがあるかもしれない。雨の中を一本の傘で歩きながら、「お父さん、一人になる」と口にした。30年前の若い頃からずっと野宿者の夜回りにこだわり続け活動し、一人でも歩いていたのに、息子がいると何か気が弱くなったのかな。「アメリカから帰ったら俺またやるよ」その言葉にすぐ元気になるオヤジであった。橋の下の洞窟には今日は行けない。水かさの増している川の脇で一人寝起きを続ける人がいる。

西公園の旧図書館。Hさん不在。陸橋下ハウスのOさんは息子の黄色い雨合羽を見るなり「これいいねえ」と言った。「最近はどうですか？」と聞くとすぐ近くで中高生が夜中に花火をして騒いでいたり専門学校生がトイレにスプレーでいたずら書きをしているとのこと。息子に旅立ちの挨拶をさせた。「来月アメリカへ行きますので来れないかもしれません」「アメリカ？留学？」「はい」「そうかあ、アメリカはいいよ、おれは若い頃中国へ行ったことがあるけど、とにかく海外は日本とスケールが違う。でかい。何しろ……」それから話が続く。この55歳のおじさんに息子は愛されていた。ありがたいと思う。

橋下ハウスへ降りて行こうとすると、ハウスの外が明るくなった。何と雨があたらないように小さなビニールテントを張りその中に椅子とテーブルまで用意してロウソクを灯し、SgさんやSnさん、それにまだ若い女性のSkさんが私たちの来るのを待っていたのだった。「お待ちしてました」声をそろえて言われた。「へええー、ここはなかなかいいですねえ。今から宴会でも始まりそうですねえ」「ええ、泊まっていてもいいですよ」「いえいえそれはけっこうです…」笑いがおこった。今日はここがコースの最後になるので、みそ汁の具やスープも用意された鍋にすっきり移してきた。神社の裏は不在にちがいないので、今夜は省略した。

今日はこの雨。親子ははぐちよぐちよになって「この服お母さんたいへんだ」などと言い合いながら帰った。

3. 炊き出し 7月8日(土)

雨の日でなくて、それだけでもよかった。ボランティアの生徒6人とM。今日は普段学校の事務室にいるMも、親しい若い女性を連れて参加していた。さらにSK学院からもボランティアが4人参加した。ほとんどの人(私も)が彼女らは高校生だと思っていたら、反省会の席上で大学生だということが分かって皆顔から火が出たようだった。いずれにせよ今日は若いお嬢さんたちのボランティアが10人以上もいたわけで、準備の場も炊き出しの現場も、明るく華やかな弾んだ雰囲気だったという、反省会での古参のご婦人の感想が相次いだ。本校からは生徒の母親で最後まで一緒に参加してくれた方もいた。炊き出しの帰り道はいつも「ああ疲れた」と大あくびをする息子も、「ああきょうは楽しかった」などとのたまわっていた。生徒の一人にツーショットを求められて気分がよかったのだろう。若者は元気なのがいい。ところで私はというと、実は午前中は仕事で行けず、昼に家へ戻ってから出かけた。車を乗り付けると「先生、今来たんですか？もう終わったんですけど」笑い顔に目が三角、口がとがっている。ちえっやっぱりきたな。「言うと思った。おまえたちの事が心配で無理に来たんだ」全然説得力のない言い訳だった。今回のこのボランティアの子たちも実によく働いてくれたとHさんなどからお褒めの言葉をいただいた。この子たちを動かしてくれたチカラに感謝したい。またMの連れてきた娘さんも絶賛されていた。

高校生たちはこの日一日で100人の人と出会い、交流体験をする。準備に追われる2時間半。初めて出会う30人のボランティア仲間たちと意思疎通を図りながら共同作業をする。声がかかり指示を受けるまでじっと立っているわけにはいかない。炊き出し現場で70人のホームレスの人たちと挨拶を交わす。声をかけられ、それに返す。優しい心根の彼女たちの感受性にとって、この体験がよい糧となりますように。